

ミイツ 循環図

同じ「ミツ」と、陽としては「火」と称し、陰としては「水」と称する。

無宇宙

宇宙

ノホルモノを
「火」と称する。

ノダルモノを
「水」と称する。

(素戔
のひこ)

奉る

トヨノミモヒを

この循環に上り
乗るための作法。

人間

アマノマナサの
ミモヒを汲み

(ヨモツウニ)

(ナカツウニ)

(ヨモツウニ)

觀門の見方

ミイツ
→ サキリ

空なる實在（神の極威の二とで、極無極、極大極小と表現）

裏↓無宇宙

表↓實體

表の表↓大宇宙

裏の裏↓點

裏の表↓零令

表の裏↓直日

表と裏と合わせると↓ニ↓経↓◎↓◎↓三↓身↓一↓○↓

火経身↓日止↓完全圓成の宇宙である實體である

此のやうな國を高天原とな
へて日止と呼ぶのは、完全圓成
の宇宙である箇體であるとの義
にある。

ですから日止（ひと）と呼ぶ
は國家統治の全權であり完全
圓滿なる上下である。

言ひ換へると、日本天皇を日
止にして、日本天皇國を日止に
して高天原にして有道と云ふの
がある。

ひとみなは、なをことにして
われありと、かたみにぞしる
べみのうけひて。

マウシデンイフノニハ、クラシニコマラヌヒトニテケレハ
孟子曰。無恒産。而有恒心者
惟士爲能。若民則無恒産。因

ル。ソレヲモテ。ソレヲノヒトビトガ。アムラクニクテセル
無恒心。苟無恒心。放辟邪侈。

無不爲已。及陷於罪。然後從而
刑之。是罔民也。

マウシデンイフノニハ、クラシニコマラヌヒトニテケレハ
孟子曰。無恒産。而有恒心者
惟士爲能。若民則無恒産。因

ル。ソレヲモテ。ソレヲノヒトビトガ。アムラクニクテセル
無恒心。苟無恒心。放辟邪侈。
無不爲已。及陷於罪。然後從而
刑之。是罔民也。

マウシデンイフノニハ、クラシニコマラヌヒトニテケレハ

マツリゴトとは國家の中心か
ら外郭に向つて油を供給するこ
とである。

其の供給された油を運用して
外郭から中心に還して行くのが
祭である。

それで、マツリゴトとマツリ
とは内と外と、上と下と、本と
末と、枝葉と根幹とが相互に交
流疎通する行事なので、相互に
表裏をなしつつ國家を治め、天
下を和ぐる妙用を現するのであ
る。

油とは比喩である。

猶太人が膏注ぎたるものと云
へる如く、油とは神の稜威であ
る。

それ故に又、水とも云ひ、火
とも云ひ、靈とも呼び、無とも
稱するので、極で、無極で、極
大で、極小で、物で、純男で、
罔象女で、佛で、恵保婆で、閻
魔天で、必竟、空なる實在であ
る。

其の實在は裏から観れば無宇

宙で、表から観れば箇體で、表
の表から観れば大宇宙で、裏の
裏から観れば點で、裏の表から
観れば零で、表の裏から観れば
直日で、表と裏とを合せて観れ
ば二で、経で、○で、◎で、三
で、身で、一で、◎で、火経身
で、日止で、人で、人間世界に
ほかならぬのである。

火人（ひと）と日止（びと）
と人間世界との關係を簡單に説
明すれば如上である。

そのそのの、こころこころに
そのさまの、うつるをみれば
かみながらなる。

以上 昭和十四年五月十五日

山谷 識

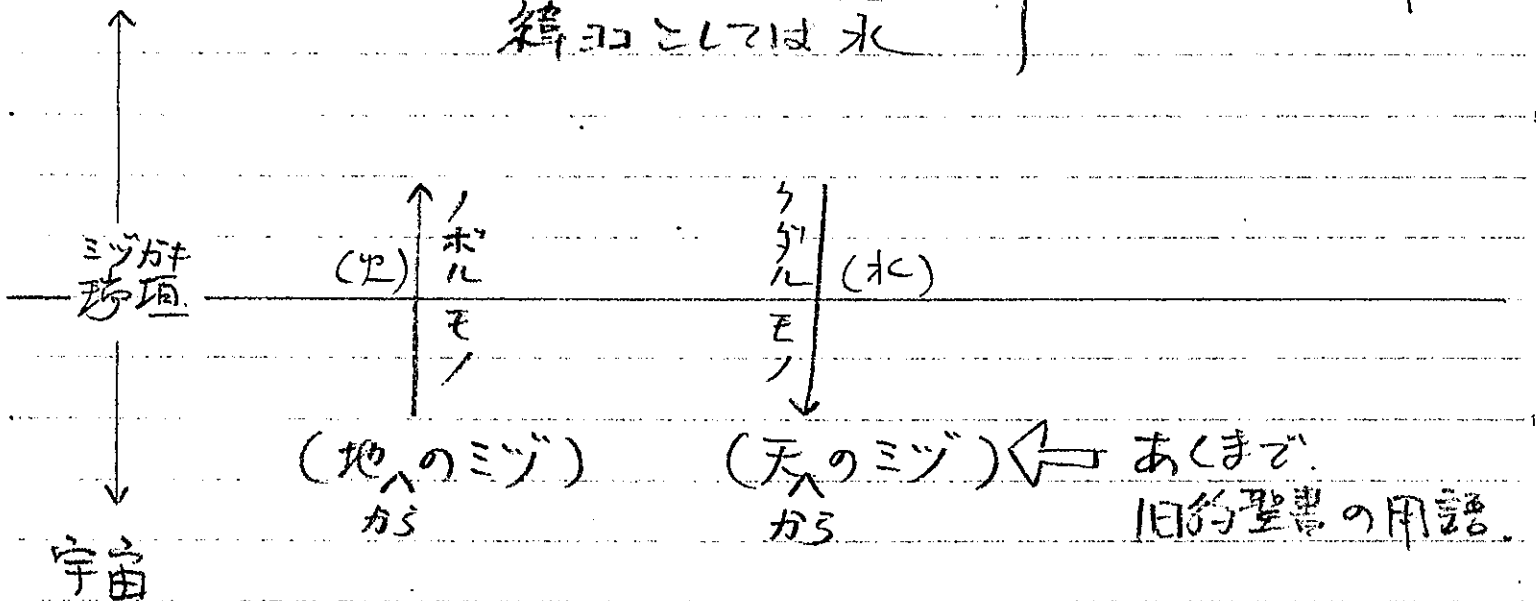
(幸.136)

ミクスビノカミ

無宇宙

ミヅ、経テとしては綾威
鶏ヨとしては水

次に三産霊神



ミヅ はコトマ であり、霊的な実体の名称だが、
ここで言う「火」や「水」はただの呼称である。

ノホルモノ …… 「本質的に昇り続けるモノ」という意味ではなく、

循環するミヅの昇局面を指して、

「今は上昇しているところのミヅ」の意味。

ウダルモノ …… 上記と同様。

觀門の見方

ミイッ
サキリ

空なる實在（神の授威の二とて極、無極、極大極小と表現）

裏↓無宇宙

表↓圓體

表の裏↓大宇宙

裏の裏↓點

裏の表↓零

表の裏↓直日

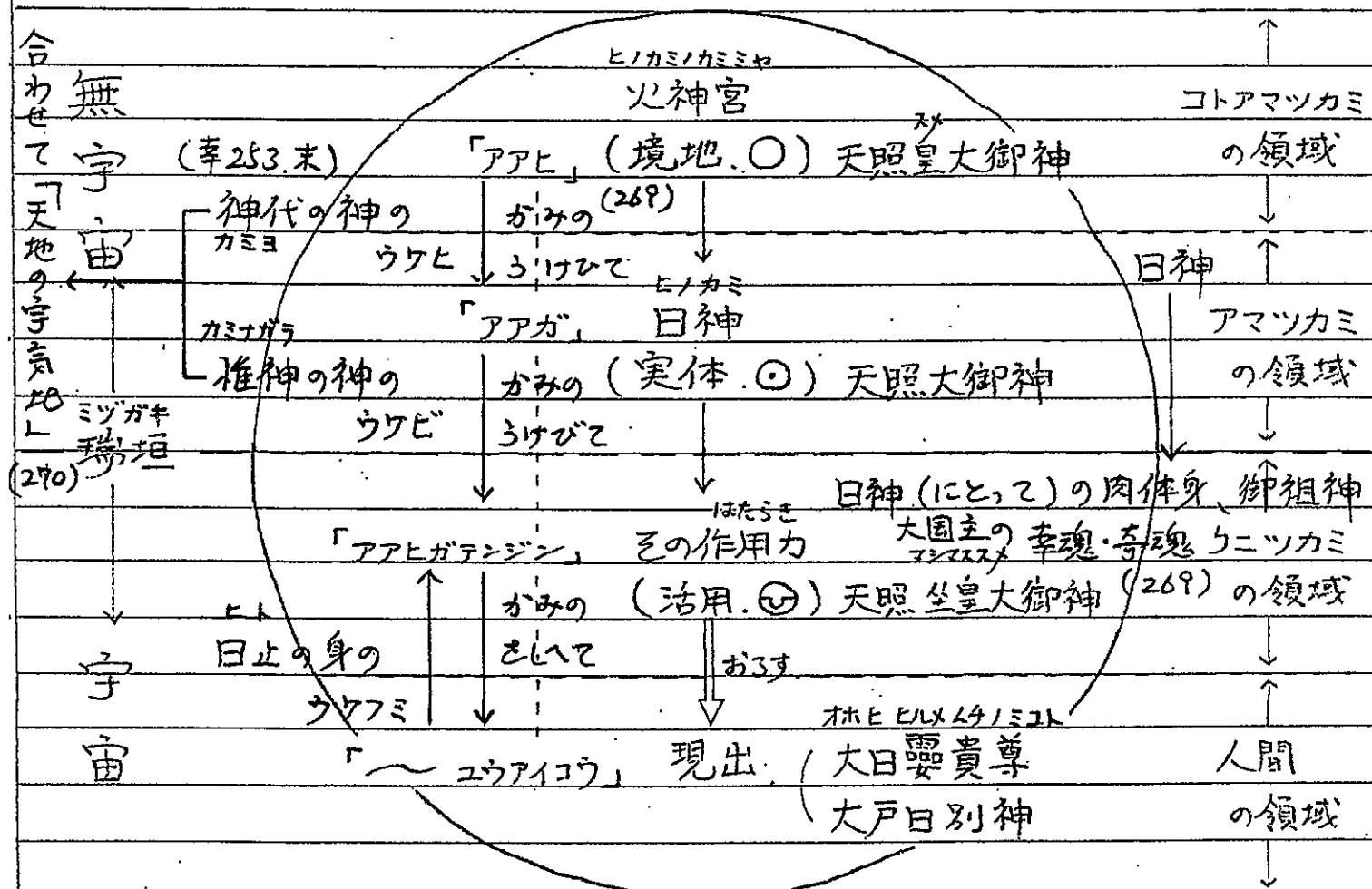
表と裏を合せると↓二↓経↓○↓◎↓三↓身↓一↓○↓

火経身↓日止↓完全圓成の宇宙である圓體である

とは

十四字秘言と大宇宙概念図

ヒノカミ はたふま



第九章は、死生解脫の祕を教へ、

第十章は、宇斗の神言靈を垂示されたのである。此の神言靈は、一言の萬城主の主るところで、古事記は之を下つ卷に記されたが、事實は勿論神代紀である。

神の代の、神の祕事。人の身の伏し仰ぎつつ。今日もかも、國平けく。明日もかも、うら安くこそ。内外隔てず。

靜寧和平の神國樂園を築くには、唯是、爾が身を爾自、倭の青垣東の山の上に齋き祭ればよいのである。

産土神の神德は、^{ミハタラキ}そのまゝ「ハハ」と成り鎮守神の神德は、そのまゝ「チチ」となる。合せては「ミオヤ」と呼ぶ。爾^ナが身は、固より「チチ」と「ハハ」との一つ身なれば、「ミオヤ」である。

ちち、はは、みおや、みおや。なべてのひとびと。わが、さきのよの、ちち、はは、みおや、みおや、われに、ゆかりある、なべての、みみたま。みな、ともに、さとりの、さとる。さとりの、さとれば、あまねく、ひとつなり。ああひがてんじんゆうあいこう。と、たたへまつるなり。

日本の古典は、之を傳へて、

天泰で水火既濟だとも云ふ。それを、日本語では、「イキシニ」と順位に稱へては、顯界神域の壽詞だと教へ、「シニイキ」と逆に稱へては、幽界魔境の祕言だと云ふ。それは、本來の相としての體の上から、神の教へ給ふので、活用としてならば、地天と云ひ水火と呼ぶが如く、「メヲ」と稱するのである。

此のことは、日本語の音義が教ふるのであるが、細かいことは、「言靈祕説」に譲り、天鳥船神の行事に用ゐる音を挙げますと、

第一に、「イ」

第二に、「エ」

第三に、「ホ」

第四に、「サ」

第五に、「ウ」

の五音である。

之を全身の動作と共に活用して妙境に入り神域に到る。

第九節

第一の「イ」は、上下の齒を合せ、舌を上げ氣味にせねば發することが出來ず、正しく眞直ぐに出て上升する音である。それで、此の音義を表象して_んと書いたのが、イの字原である。正しくして升るから、非常な偉力を

今茲に、此の「マ」と彼の「マ」と云ふのは、古老が、「ミカガミ」と教へて、「カガミノフネ」の祕事であるから、筆録する事は許されぬのだとて、古典には、「狀貌難言」と傳へて居る。けれども、學徒の爲に、いくらかでも、手がかりに成るやうにと、僅に外貌だけでも記さんことを願ひつつ、祕庫の扉を敲くのである。

いつの世に、誰築きてや。おと山の、山の麓の、道しるべ。知らぬ顔なる、旅人の、往き來る見れば、秋寂しけれ。

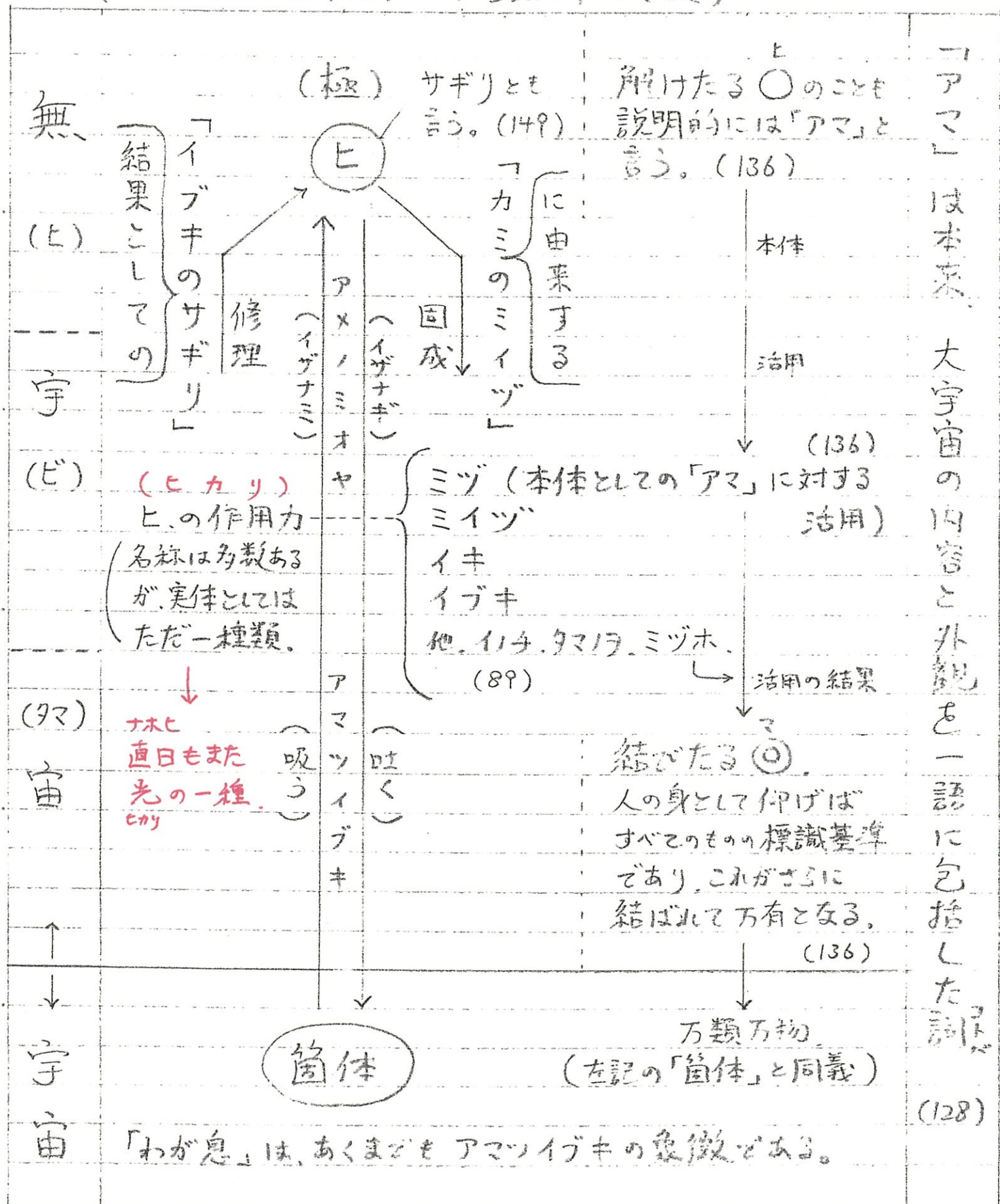
此の「マ」と彼の「マ」と云ふ。それを圖に示せば、○^ヒであり●^{ツキ}であり、或は、△^ヒであり▽^{ミツ}である。詞で云へば、イキ・シニである。古典は、之を、「イキシニホ」と傳へ、宇宙萬有は、生又生、死又死、生滅起伏の連環であると云ふことを教へてある。

「イキシニホ」とは、「ホ」の音義に依つて、宇宙と無宇宙とを説示したので、それを、物として見れば、「火」である。燃ゆる火なので、有る物で、無い物で、有るとも成り、無いとも成るとの意で、先聖が凡愚を憐みたまへる遺響なので、火は常に起滅を示すから、人は其の様を見て生死の實相を觀よとの慈悲心である。

○^ヒは生であり、●^{ツキ}は死であり、△^ヒは上るのであり、▽^{ミツ}は下るのである。△^{ノホルモノ}は火で、▽^{クダルモノ}は水で、此の二つが相交はれば、■^ユと成る。水が上から火を覆ふもので、之を湯と呼びて、支那人の所云水火既濟で、太平嘉悅の狀態である。それを逆にすれば、△^{火水}▽と成つて、相乖離するから、火水未濟と云ふ。

けれども、本來の象を云へば、火は上で水が下に在ること天と地との如くである。で、天地と云ひ火水と呼ぶのが正位である。然しながら、相交はるにあらざれば、相争ひ相闘ふ。故に、天地否とも火水未濟とも云ひ、地

(カッコ内の数字は、すべて言葉の率の倍数)



「わが息」は、あくまでも アマツイブキの象徴である。

ぎて、目眩み、耳聾するが如くにして、誤つて異端邪説の鬼窟に陥ることが多い。學者の特に留意せねばならぬところである。

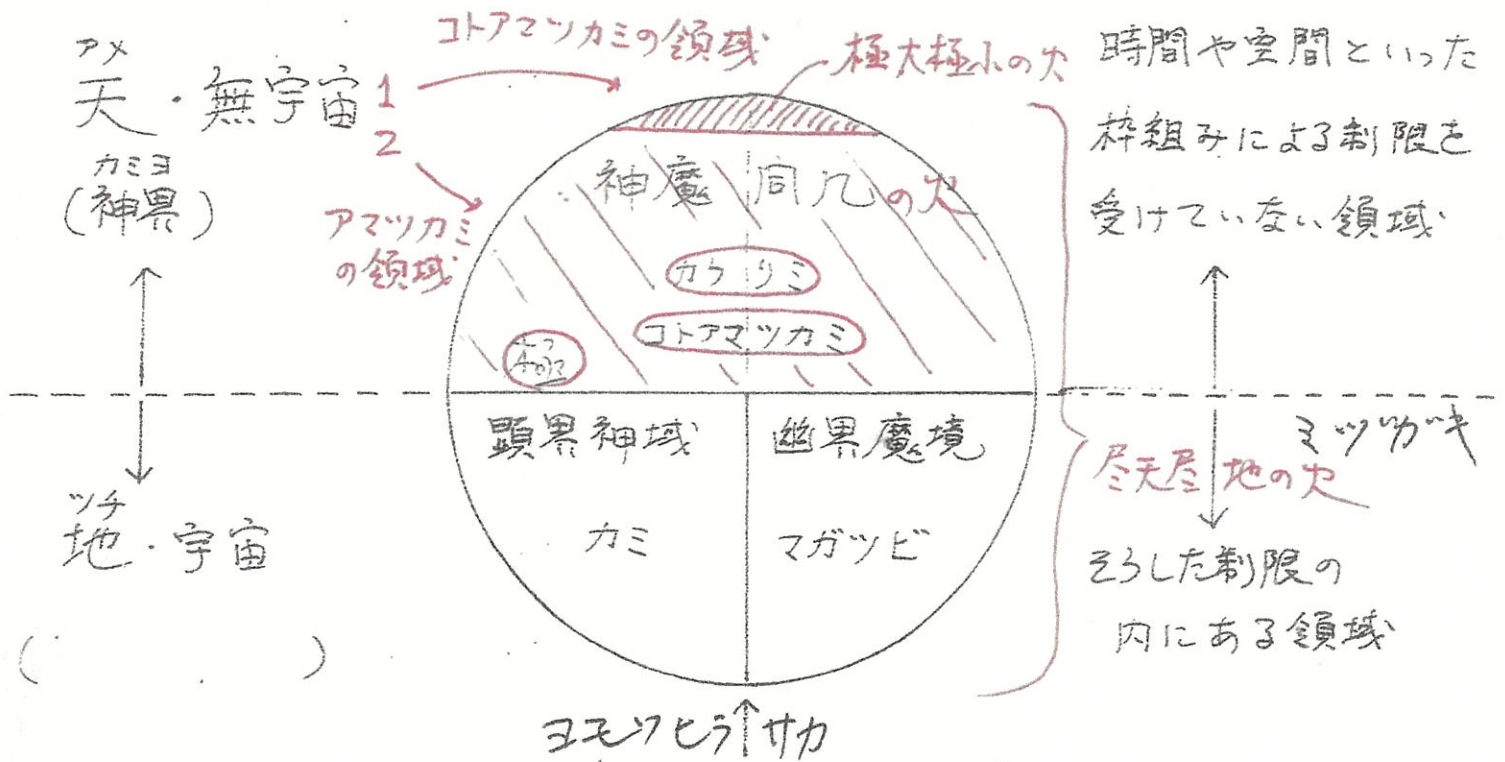
第五、「陰陽合躰」。アノミハシラクニノミハシラ先師の傳へた神事に、一つの印相が有る。それを、「天沼矛」だと教へられた。此の「天沼矛」を以つて、大虚空を兩斷すると共に、大音聲を發する。此の音聲が、一線の光明と成つて、宇宙を貫き徹す。之は、氣吹戸主イブキドヌシの神事で、妖魔調伏の祕事である。此の一線の光明を發する主體は、我であるが、我の内に結ばれたる陰と陽との兩極が、其の活用を現はすので、此の神事の印相は、「天御柱・國御柱」アメノミハシラクニノミハシラを象徵したものである。合せては、「心之御柱」シンノミハシラと稱へまつりて、ヒノカミ神の御座にてましますのである。

古事記だけでは、此のことが明瞭でないが、「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神が、淤能基呂嶋に、天沼矛を指し立てて、國の中の天御柱となされた」と、舊事紀に載せてあるので、古事記の本文を補ふことが出来る。之は、此の圖のとほり、ヒカリ⑤である。其の、國と云へるは外廓で、フ⑥であり、天御柱とは、中心の一點であると共に、國を統率したるものであるから、ヒカリ⑦が即、天御柱だと云ふことになる。すると、之は同時に、國御柱で、天御柱で、心之御柱であるものが、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神である。之を、「陰陽」と稱へまつりて、二柱の一柱で、極小としても、極大としても、共に、陰陽である。それは、陰と陽との二つであつて、そのままに、一つなのである。

物と云ふ物を、何のやうに分割しても、陰と陽との合体なので、又、何如に累積しても、陰と陽との合体である。之を、ヒカリ⑧と稱へ、日神と白しまつるのである。幾度となく繰返して述べたやうに、日とは、二つの光で、ヒカリ⑨である。メ⑩と呼ぶところの⑪が、神人産出の胎であることは、「天成り、地走りて、高天原が出來た。高天原が出來た。」

天地概略図

アメとツチを合わせて、大宇宙と称する。



この二項対立の図式は、^{ツチ}地の側でのみ有効。

^{アメ}天の側には及ばない。

アメ

天とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する、

という時の「ア」の領域。

“ 物理学的に言えば、宇宙創世以前の領域、

ある。

斯のやうに察て來ると、「故人を齋る」には、先決問題として、神の人と成るべきことである。と云ふと、また或は、甚難事でもあるかの如く思はれそうだが、實は誰でも、爲ようとすれば出来ることである。例へば、父母妻子の死に際會したやうな場合、人の常として極度に緊張するから、我としての直日の人と成ることが容易である。

我としての直日と云ふのは、八十萬魂がそのまま凝結して、全個體一團の火と化るので、之を、古典は、「櫛の雄柱一つ火」の祕言として傳へてある。「伊邪那美命のお崩れなされた時に、伊邪那岐命が、湯津津間櫛の男柱一つ取り闕きて、一つ火を燭して、御覽になられますと、宇土多加禮斗呂呂岐て、八雷神に成つて居られた」と記して居るが、比咩神御崩御の大事にお會ひなされても、五官的にだけでは、なほ未徹底な爲に、神魔同凡の「一つ火」を燭して、はじめて、その實相を明らかに得たのである。人としてならば、全身心が、神の火と成つたので、本來本有の眞の相を顯し來つたので、其の原に歸つたので、或は、終に反つたとも云ふので、「鏡の船」を造り成したので、此に、「黄泉比良坂」の一線を劃して、妖魔調伏の祕儀を行じ得るに到つたのである。先にも繰返して述べたやうに、支那人の傳へた「喪」の字が、此の意味をよく教へて居る。喪とは、十口口一以の合成で、中央の一線が、顯界神域と幽界魔境とを分つもので、此の境界は、線無きの線で、「メ」と呼ぶのである。即、繼ぎ目、合せ目、變り目、別れ目、代り目、などと用ゐる目である。

此の目は、陰の「メ」であり、陽の「メ」であり、左であり、右であり、左右を合せたる目であり、母であり、子であり、母と子と、子と母とを合せたる「メ」である。母としては女で凹で、孔で穴で、左目で、「ヒダ

リ」であり、子としては芽で凸で、右目で、「ミギリ」である。

古典に、八雷神ヤクサカミと傳へたのは、子としての「メ」で、豫母都志許賣ヨモツシコメと呼ぶ。黄泉津大神ヨモツカミと傳へたのは、母としての「メ」で、亦等しく豫母都志許賣にてまします。別れては、母と子であるが、共に「メ」である。

此の「メ」と、彼の「メ」との偶ひては別れ、別れてはまた偶ふ。過去の過去際より、未來の未來際に彌りて、止む時無く、息む時無く、運り行くのである。

古老教へて云はく、

くすしかも、あやしきかもな。あめつちの、ありのことごと。ものみなは、ここにむすびて、そこにとけ、そこにとけては、またむすぶ。そこにわかれて、ここにあひ。ここにあひては、またわかる。わかれつ、あひつ。とけつ、むすびつ。ゆきつ、かへりつ。まがたまの、いほつみすまる。くしみたま、くすしかしこし。さきみたま、さきくまさきく。やさかにの、ふゆをこそませ。かくりよの、さちをこそませ。なきひとの、みたまみし。いまみしかみ。たまほこもちて、いまぞきませる。たましひもちて、いにますみたま。いうをえあ。

と。

その「ミタマ」は、「都夫多都御魂ツブタツミタマ」であり、「阿和佐久御魂アワサクミタマ」であり、「底度久御魂ソコドクミタマ」であり、猿田毘古神サダヒビコノカミの御魂である。

「猿田毘古神の御魂」の神傳が存るので、私どもは、死者を齋るに、「水」を以つてすることを知り得たのである。天の「ミヅ」と地の「ミヅ」とを合せて、「麗はしき壯夫ヲノコ」を造り成す道を悟り得たのである。「大穴牟遲神

ミツマ

⑦

ミツマ
御霊

⑦

ミツマ
御魂

⑦

(直日)

ミツマ
身魂

コトアマツカミ

アマツカミ

クニツカミ

マ カミ
「魂の神」
5音1語

ミ カミ
「身の神」
4音1語

ミツ カミ
「身魂の神」
3音1語

ミツ
カミ

ミツ
ミツ

別れ

解け

往き

合ひ

結び

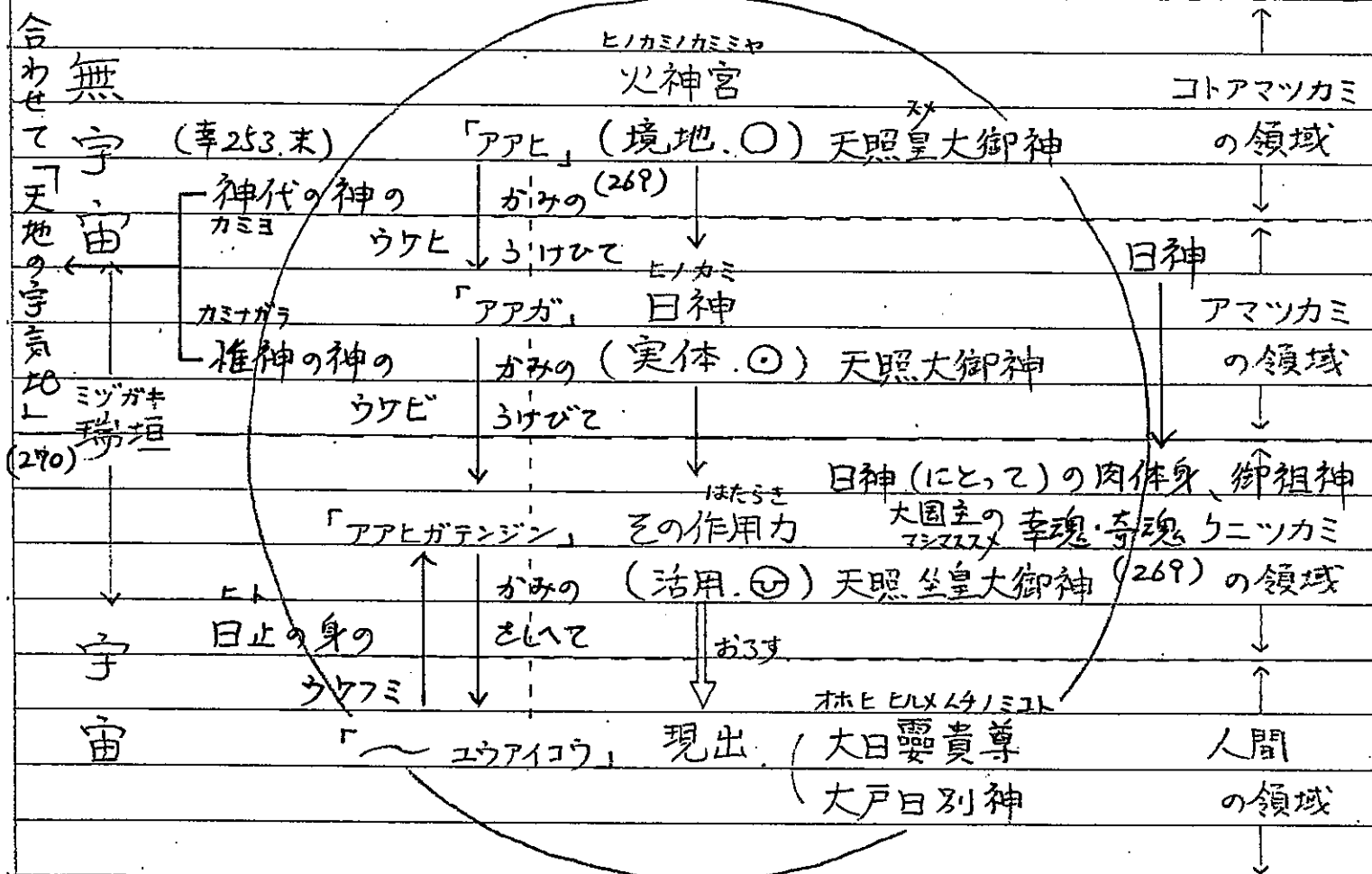
返り

ミツとして
循環
(幸. 205)

2019.12.17.

十四字秘言と大宇宙概念図

(あくまでも「理解の便宜」としての概念図である。実際には、
日神の作用力は、最初から宇宙の隅々にまで行き渡っている。)



ホギコトタマ(二)

汝は あしはらの なかつくにに ましまして
この かみことたまを

あまねく をしへ

あまねく しらしめ

あまねく おこなはしむべきものなり。

これの おほかみことたま

これの かみことたま とは

阿知米。 阿宇。 於於於。

阿阿比。 阿阿賀。 去衣

阿阿比賀天呼爾呼。

阿阿比賀天呼爾呼由宇阿伊固宇。

宇。宇。宇。宇。宇。止。宇止。宇。宇止。

功德無量。

一念奉称者。

直往於天界而。

無迷惑無惑乱也。

速消於罪障而。

生福德生明智也。

能伏於衆魔而。

安人天平地界也。

日神とは称へまつる也矣。

日神の神わざ なりなりて、

大字大宙、皆是レ なることを知らるるなり。

又これ 火なることを知らるるなり。

これはこれ なるなり。

アアヒガテンジンユウアイコウ。にして、

直日とは称へまつるなり。

直日とは即天地。

天地は即陰陽。陰陽は即乾坤。乾坤は即高卑。高卑は即凹凸。

醜は即善意。善意は即真妄。真妄は即水火。水火は即 なる。

⊖ は即 なるなり。

和楽にして人天を生じ。

困厄しては妖魔となる。

無宇宙↑
↓
宇宙

時空外領域
ヒノカミとしての
(本来の高天原)

カミ アノミナカヌシカミ
隠身 天之御中主神
(大宇宙の大中心)

(極)
アマテラスオホミカミの
ニギミタマ (知魂)

神話上の高天原

第一階層
タマノカミとしての

アマテラスオホミカミ
天照大御神
(宇宙の中心)

故人の
直日
↑ (第一魂)

神話上の
八百万神
(この外郭)

(この外郭)

故人の
第二魂
↑ (奇身魂)

タマガキ玉垣

第二階層
ミノカミとしての

スサノミナノミコト
皇御孫命
(豊葦原瑞穂国の中心)

故人の
第三魂
↑ (幸身魂)

神話上の豊葦原瑞穂国

第三階層

サダビコノカミの導き
(および五十年祭までのへ)

(具体的な記憶や人格) 真身魂

故人の
霊念思考
↑

第四階層

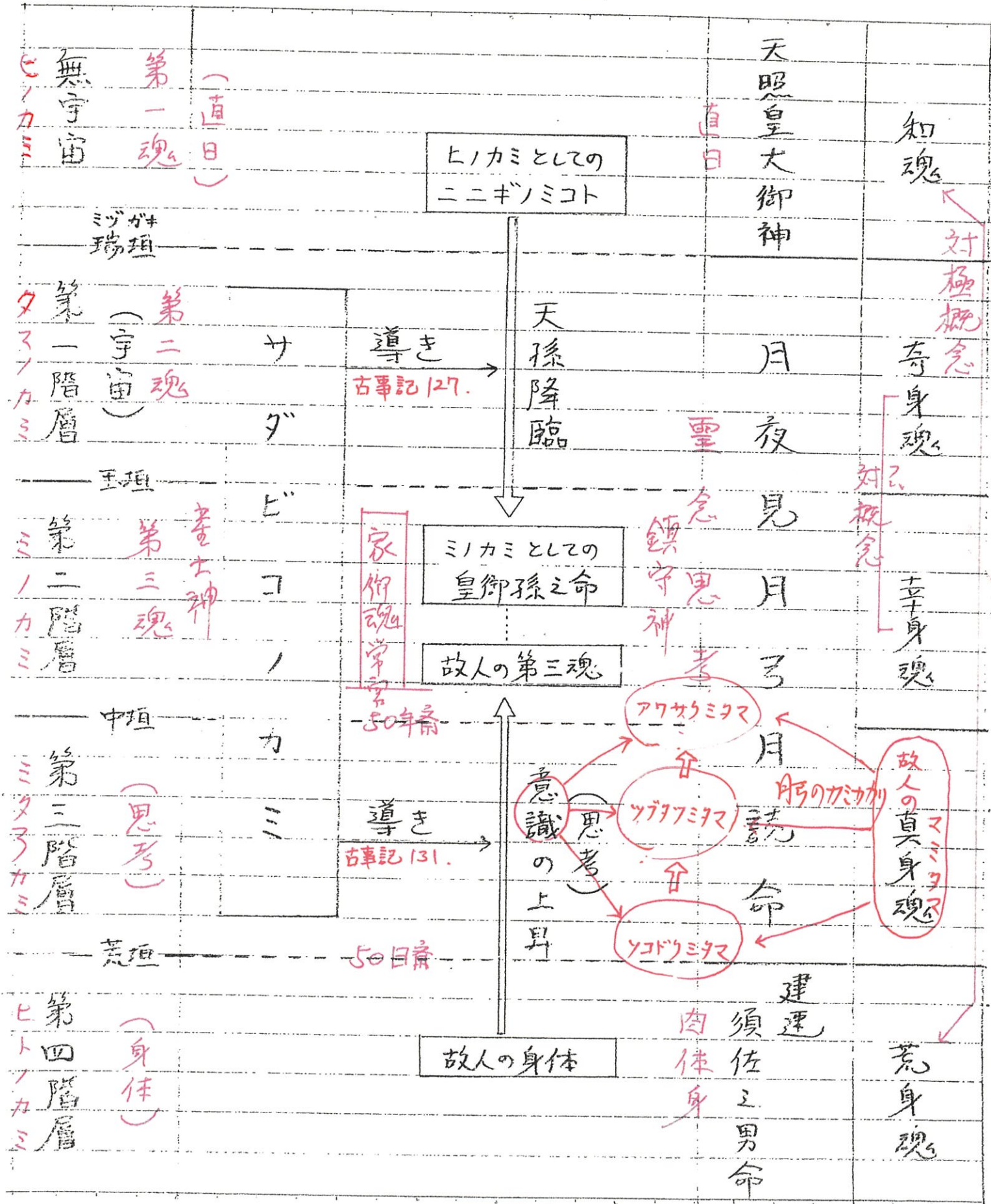
五十日齋までの ミタマ マツリ

荒身魂

故人の
肉体身
↑

(地上世界)

付図. サグビコノカミ の働き



本来、

「死者の境遇」を表わす用語なので

月神事によって「死者の境遇」そのものがより良くなってゆく過程の名称としても用いることができます。

中垣
↑

泡さく
みたま

さくさくみたまの成果

真マ
身ミタ
魂イ

粒たつ
みたま

月神事(50日斎)の終了

↓
荒垣

底どく
みたま

③ 遷霊祭

死亡直後の状況
(① 帰幽奉告)

② 帰天作法

屍

死亡直後の儀

(それでもなお、屍の側に残ってしまう要素もある)ので、火葬場ではこれを、肉体もろとも(焚尽)する。←遷霊祭で終らしきれなかった、

零の作用と天津伊吹

コトタマとしての「イキ」は、本来、「零^ヒの作用」のこと。

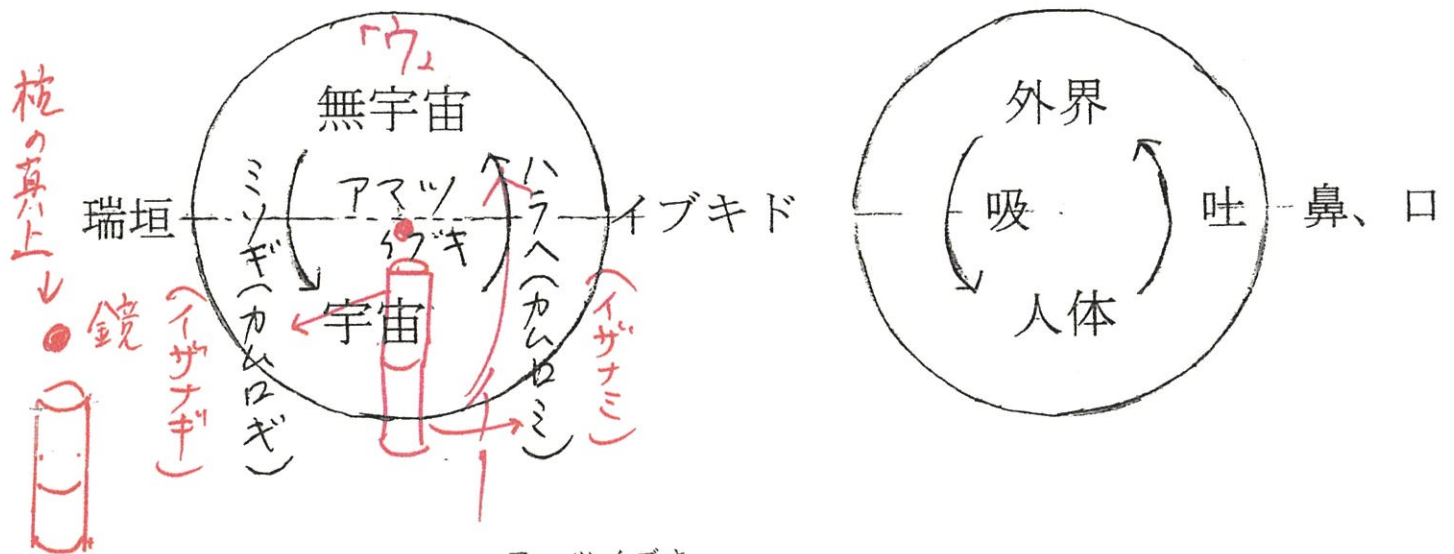
「ミヅ」とも「イブキ」とも言う。

「零^ヒ」そのものは、無宇宙と宇宙の間を自由に行き来するので、それを呼吸^{たと}に喩えたのである。

その意味においては、「瑞垣^{ミヅガキ}」を「イブキド」とも言う。

「そのもの」

「たとえば」



帰天作法における「天津伊吹^{アマツイブキ}」も、この意味であり、具体的には、
直日^{ナホヒ}を「宇宙」の側から「無宇宙」の側へと「送る作用」を意味する。

神のイブキとしては、カミナミもカムロミ、^{ひと}齊しく「イ」なのだが、
人間の身が「イー」と唱える際には、もっぱら^{ひと}無宇宙へと上昇する側を指す。

イザナギ イザナミ ニ柱神の 修理国成の図

イザナギ、天御柱 (上から下へ)

神自身にとっては
左

(カミムスヒの作用力が
宇宙の側に顕れた等)

カメナスの作用

右旋、「九」は数理

両者が合わって、
右旋左旋の運動の結果として
万物が生まれる。

神自身にとっては
右

(カミムスヒの作用力が
宇宙の側に顕れた等)

左旋、「七」は数理

スリノ作用

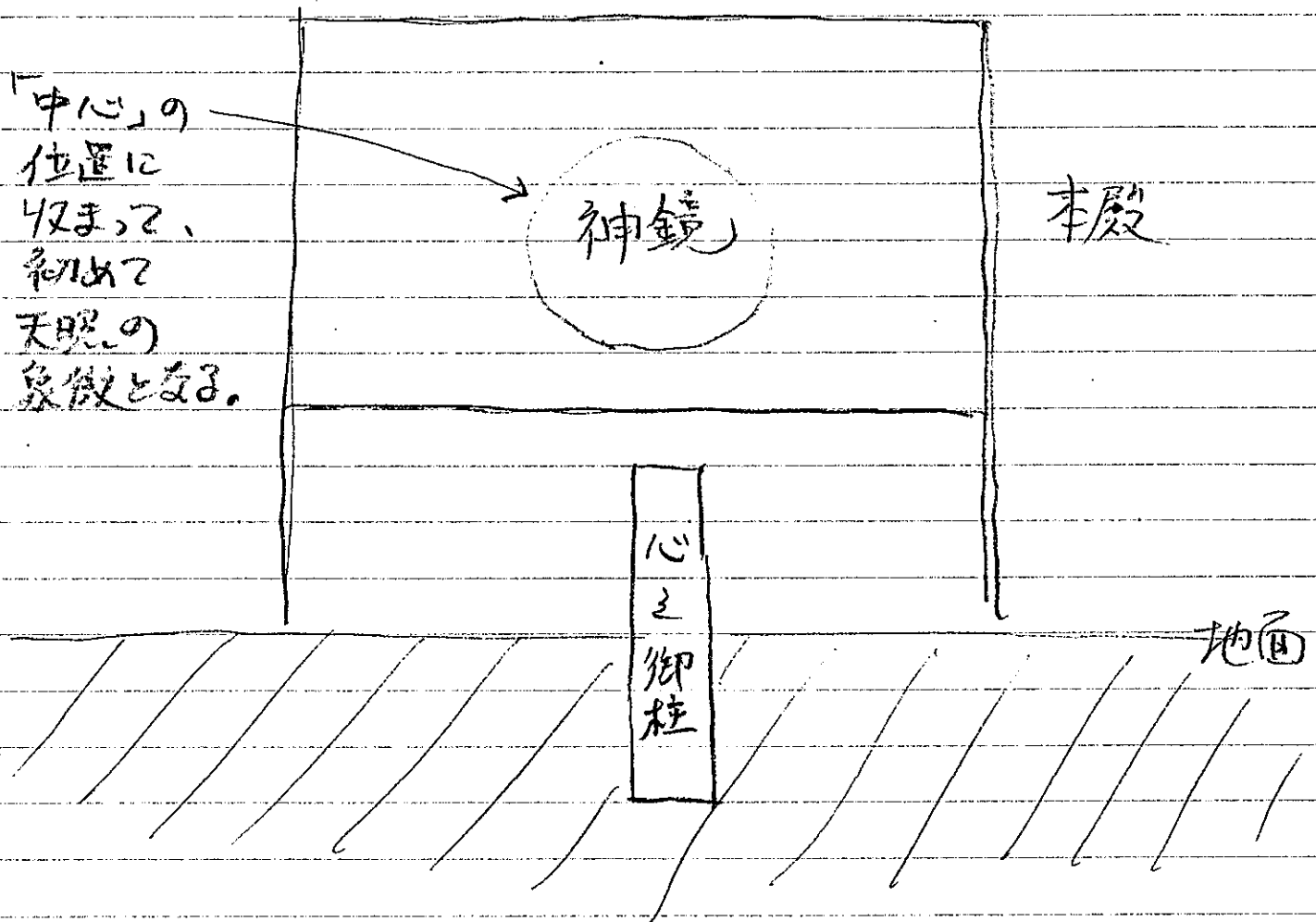
イザナミ、国御柱 (下から上へ)

合わせて、心は御柱であり、「宇宙の中心」の象徴

ともに、宇宙の側の存在であり、「^{ヒカミ}日神の^{ミウラ}御座」

伊勢神宮でも、心之御柱の奥上に神鏡が置かれた。

これは、「日神の御座」と「日神」の象徴である。

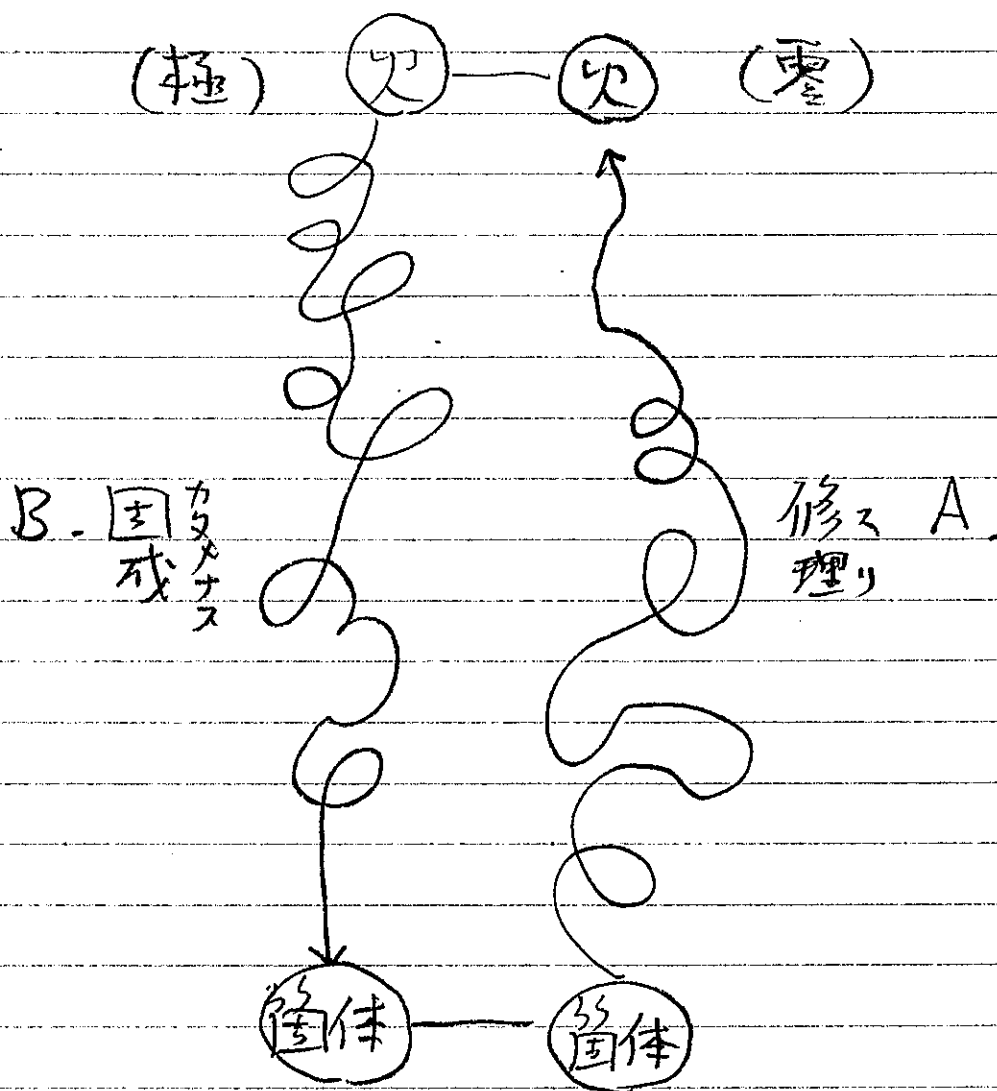


天御柱と国御柱は、ともに宇宙の側の実在であり、

タカミムスヒ・カミムスヒの顕現であり、合わせて心之御柱と称し、

これは「日神の御座」とあり、「宇宙の中心」の象徴である。

合本305頁



↓
全伴神と云ふ イザナギノオホミカミ

||
 主神としての ミコシラノウヅノミコ (アマテラスオホミカミ)
 (ヒカミとしても、フツノカミとしても)

古事記

大御神 (全体神) はすべて、同じ全体神であり、

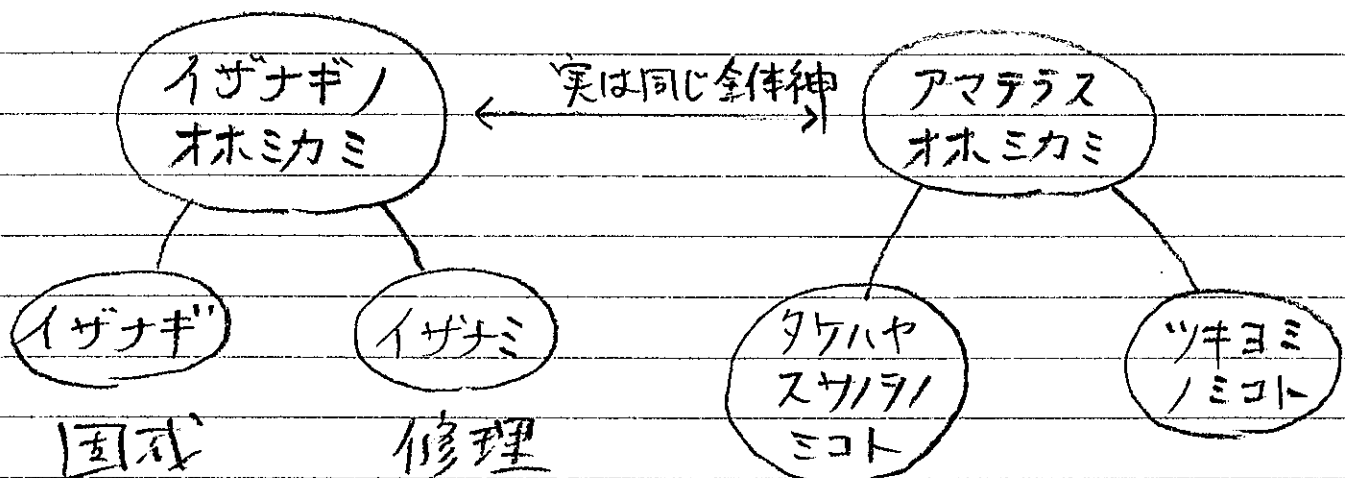
神名の違いは人間の側の観点や、その神徳による
呼び分けでしかない。

- 「イザナギノ大御神 修理国成、宇宙の創造と破壊と司る。」
- 「アマテラス大御神 宇宙の中心としての機能。」

→ アマテラスに内在する蓄力 (ツキヨミ・スサノヲ) と

外在化させて、三位一体となった姿と

「三貴子」(ミハシラノウヅノミコ) と称する。



2020.3.24.(木)

未来読合本より。

284頁の図は「変転しつ新たなる一箇体、成立す」とある
ので、^{カタナス}「国成」を表現した図であり。

一方、306頁の図は、「かくの如くに乖離分散して、その極に達し」
とあるので、^{スリ}「修理」を表現した図である、と言える。

日本天皇道より。

イザナギが天御柱として、右旋九重するが、

ここで言う「右」は神自身にとっての右なので、

人間から見れば向かって左であり、未来250頁の図と同様、

これは^{カタナス}「国成」の側を象徴する。「九」もまた数理であり、

「箇体として出来上がること」の象徴である。

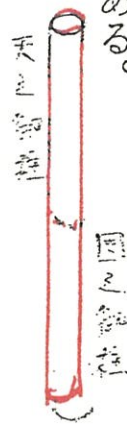
一方、イザナミが国御柱として、左旋七重する、という時、

この「左」は^{スリ}「修理」の側の象徴であり、「七」もまた

「まだ箇体性を帯びていない作用力」の象徴である。

る。共にカミなので、カミの國なので、之を神器としては、天津神籬と稱へ、天津磐境と白すので、二にして一であり、一にして二であり、一にあらざ二にあらざして三である。と云ふのは、如是の身であるとの意である。其の身を究めて見れば、小天地としての箇體であるからとて、ヨと呼ぶ。世であり代である。それは數としての四なので、生死遷轉するところの物であるとの義である。

此の物の成り成りたるは神と稱へ、その象をイと呼ぶ。數としては五である。それで、五を正數となし成數と呼び、神の氣吹だと云ふのである。



天津にモロキ

(中心)



心と知柱

なりなりて、なりあまれば、あめなるや、あめのみはしら。なりなりて、なりあはざれば、くになるや、くのみはしら。あめつちの、かみのところを、ひとのこに、つたへてゆかん。かみながら、かみのまにまに。くにつちを、きづきてゆかむ。おほやまと、みすまるみたま。かみとこそ知れ。御民もろもろ。

それだから、日本とは、神國と云ふに等しい。それが則、天津磐境である。

(外郭)

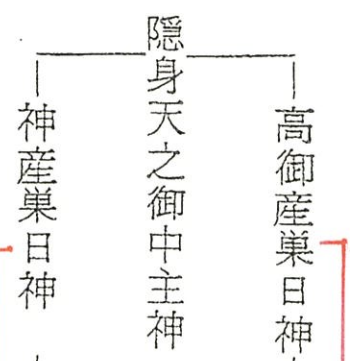
「身を清むると共に、境を清めよ。境を穢す時は、身直に穢るるものぞ」と、先師は常に誡められた。身と境とは、固より不二なので、此の身の在るところは、とりもなほさず此の境である。境を離れて存在する身としては有り得ない。境の有るところ、また必、主が在る。

「大宇宙とは、境を呼んだので、其の境の清み澄みたるさまを眺めて、「ヤマト」と稱へ、其の主を仰ぎて「スメミマ」と稱へまつる。」

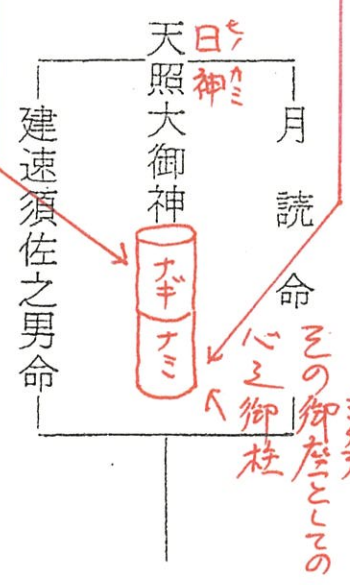
外郭

中心

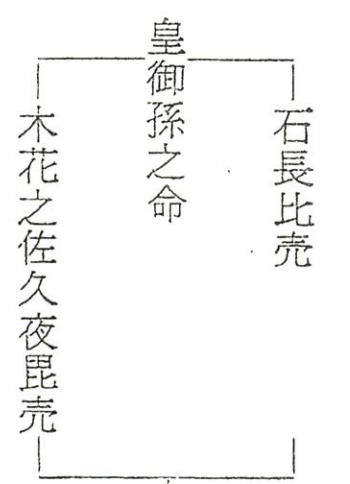
はてしと神の零



はてしと神の魂



はてしと神の身



と称

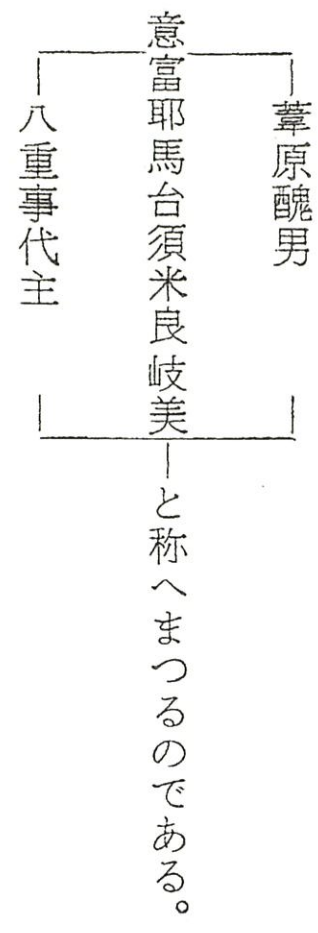
へまつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては

無宇宙↑↓宇宙

右側の三神はいずれも、

修理（破壊）の作用を司る。

（左側の三神は固成の作用）



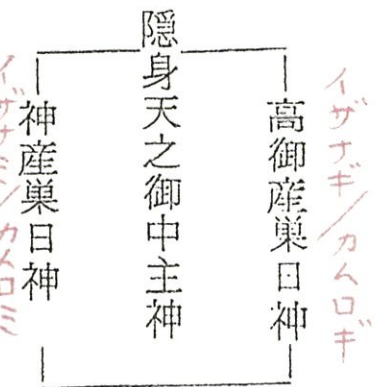
ところがその国は本来神魔包括の〇の神であるから時あつては神とも成り魔とも変わるので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。

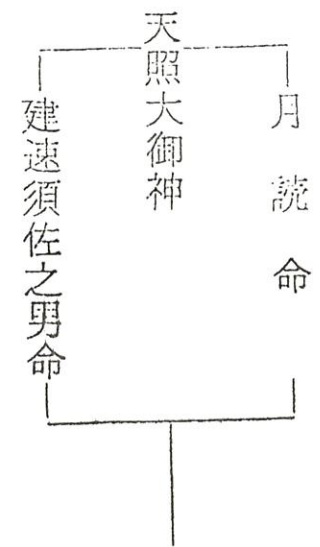
日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしますことと拝承しまつる。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の躰にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

はてしと神の零



はてしと神の魂



はてしと神の身



の神としては

大國主の別名

葦原醜男

意富耶馬台須米良岐美——と称へまつるのである。

八重事代主

大國主の息子

天皇自身は人間身ではあるが、皇御孫之命の諸力を正しく継承し、「人類世界の中心」として機能することに
 よって、オホヤマトスメラギミと称えられるべき存在となり、
 アシハラシコラとヤヘコトシロヌシの諸力をも
 行使できるようにするのである。

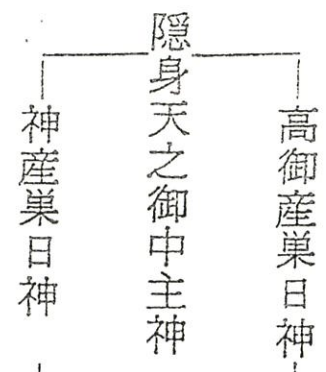
ところがその国は本来神魔包括の①の神であるから時あつては神とも成り魔とも変わる所以で人間の波瀾が其処に
 起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官
 的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。
 アシハラシコラは生大刀・生弓矢で八十神と
 平定する修理の諸力。

阿那畏。

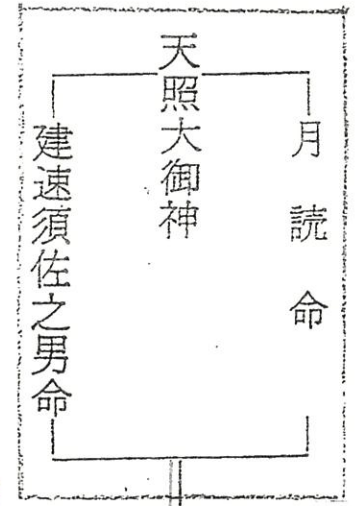
日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御
 現はしますことと拝承します。

人間世界の波瀾曲折は隠身天之御中主神が神魔の軀にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

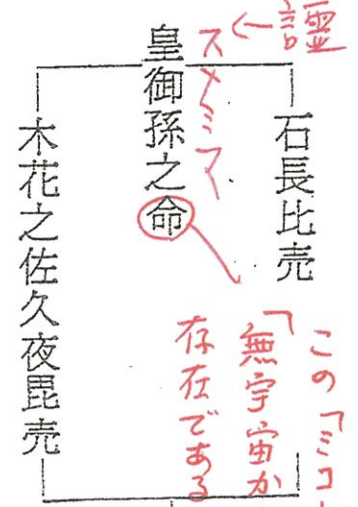
はてしと神の零



はてしと神の魂

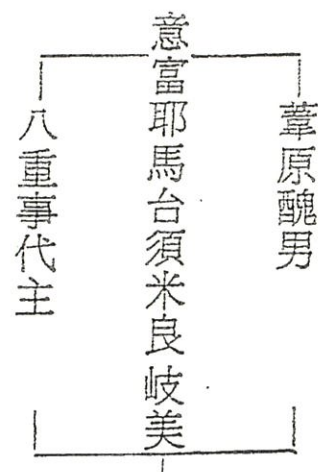


はてしと神の身



この「ミコト」は、無宇宙から降りて来た存在であることと表現と称

まつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界



と称へまつるのである。

「十指両掌」で言う「零の神としての御生誕」
即ち、スナミマノミコトもまた、本来は無宇宙の「ヒ」であ
り、それが「ヒ」のままに結ばれて降りて来たのである
「最初から身」の神として「在った」のではない。

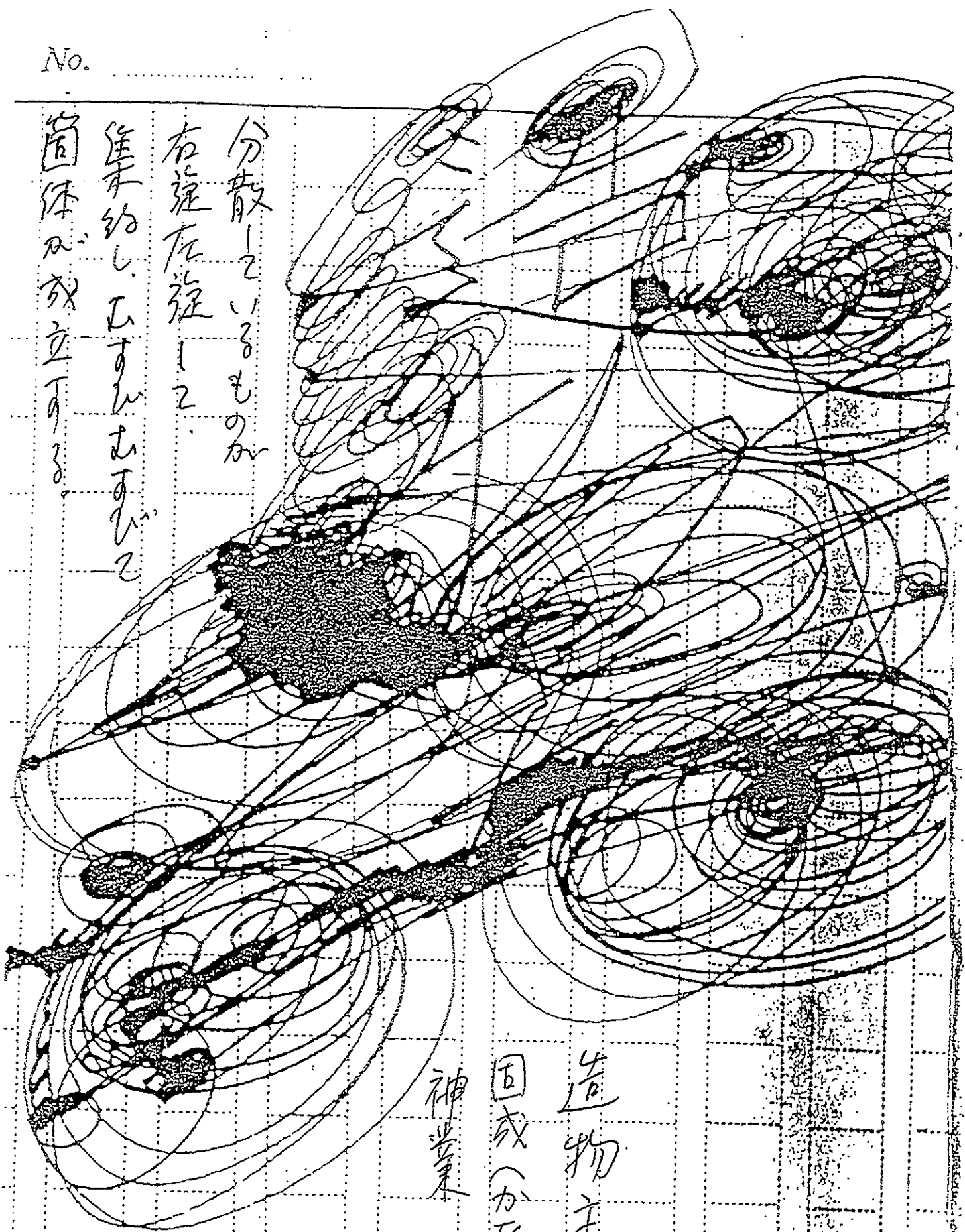
ところがその国は本来神魔包括の〇の神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に
起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官
に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御
礼はしますことと拝承します。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の躰にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

分散しているものか
右に旋回して
進行して、止まる、止まる、
筒体の成立する。



神業

固成（かためなす）

造物主

ミソギ神事の重要なことまたまことにここに存す。

『「マ」と「マ」がいかに運動し作用すれば新しきものが創造されるか』

その運動を伝へてまことに正確詳密なることまた日本神道の外にはあらざるべし。而して旧事紀の伝最判り易し。

此の「マ」とは カクノゴトク ○

彼の「マ」とは カクノゴトク ○ なるがその一例なり。

此の「マ」は経に活動き、ハクダ

彼の「マ」は緯に動く。而して、

その活動状態の一例を示せば次の如くなり。

初に此のマは右旋しつつ

彼のマは左旋しつつ

やがて 或位置に到り その方向を転じて

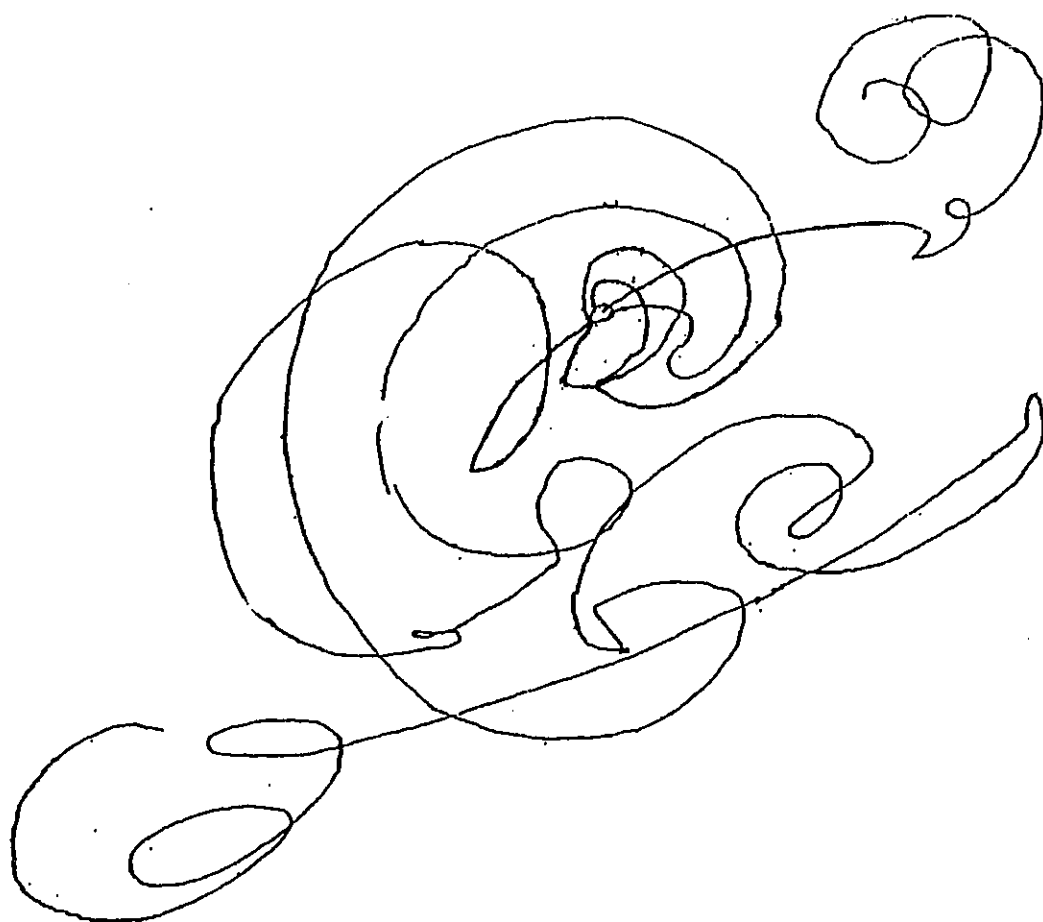
此のマは左旋し

彼のマは右旋しつつ 或は交互に

左旋

右旋

変転しつつ 新なる一箇体成立す



変転しつつ 新なる一箇体成立す



2020.3.24.(木)

未来読合本より。

284頁の図は「変転しつつ新たなる一箇体、成立す」とある
ので、^{カタナス}「国成」を表現した図であり。

一方、306頁の図は、「かくの如くに乖離分散して、その極に達し」
とあるので、^{スリ}「修理」を表現した図である、と言える。

日本天皇道より。

イザナギが天御柱として、右旋九重するが、

ここで言う「右」は神自身にとっての右なので、

人間から見れば向かって左であり、未来250頁の図と同様、

これは^{カタナス}「国成」の側を象徴する。「ん」もまた数詞であり、

「箇体として出来上がること」の象徴である。

一方、イザナミが国御柱として、左旋七重する、という時、

この「左」は^{スリ}「修理」の側の象徴であり、「七」もまた

「まだ箇体性を帯びてゐない作用力」の象徴である。

イザナギ イザナミ ニ柱神の 修理国成の図

イザナギ 天御柱 (上から下へ)

神自身にとっては
左

(カミムスヒの作用力が
宇宙の側に顕れた姿)

カメナスの作用

右旋、「九」は数理

両者が合わって、
右旋左旋の運動の結果として
万物が生まれる。

神自身にとっては
右

(ツカミムスヒの作用力が
宇宙の側に顕れた姿)

左旋、「七」は数理

スリノ作用

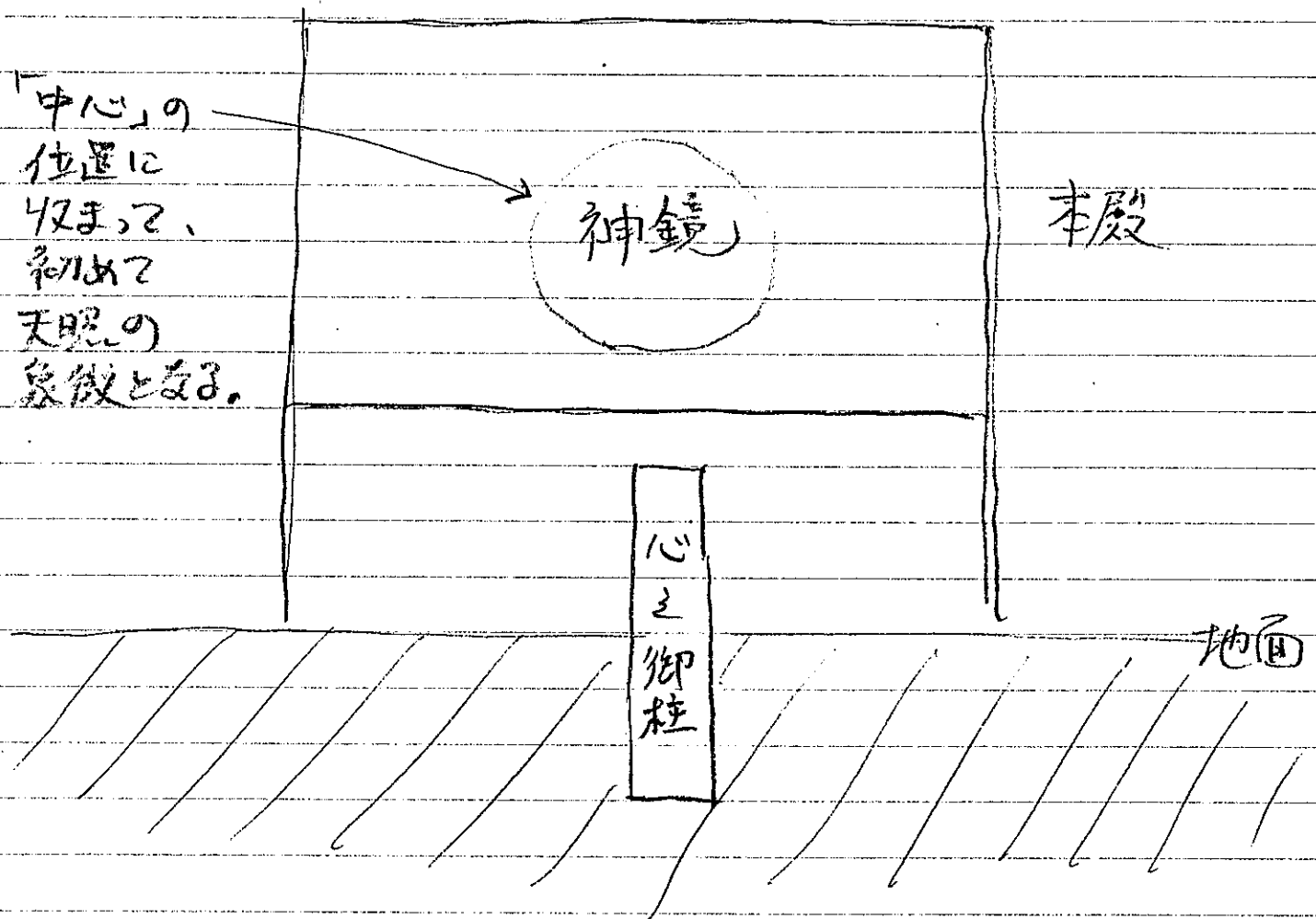
イザナミ 国御柱 (下から上へ)

合わせて、心は御柱であり、「宇宙の中心」の象徴

ともに、宇宙の傾りの実在であり、「日神の御座」

伊勢神宮でも、心と御柱の奥上に神鏡が置かれる。

これは、「日神の御座」と「日神」の象徴である。

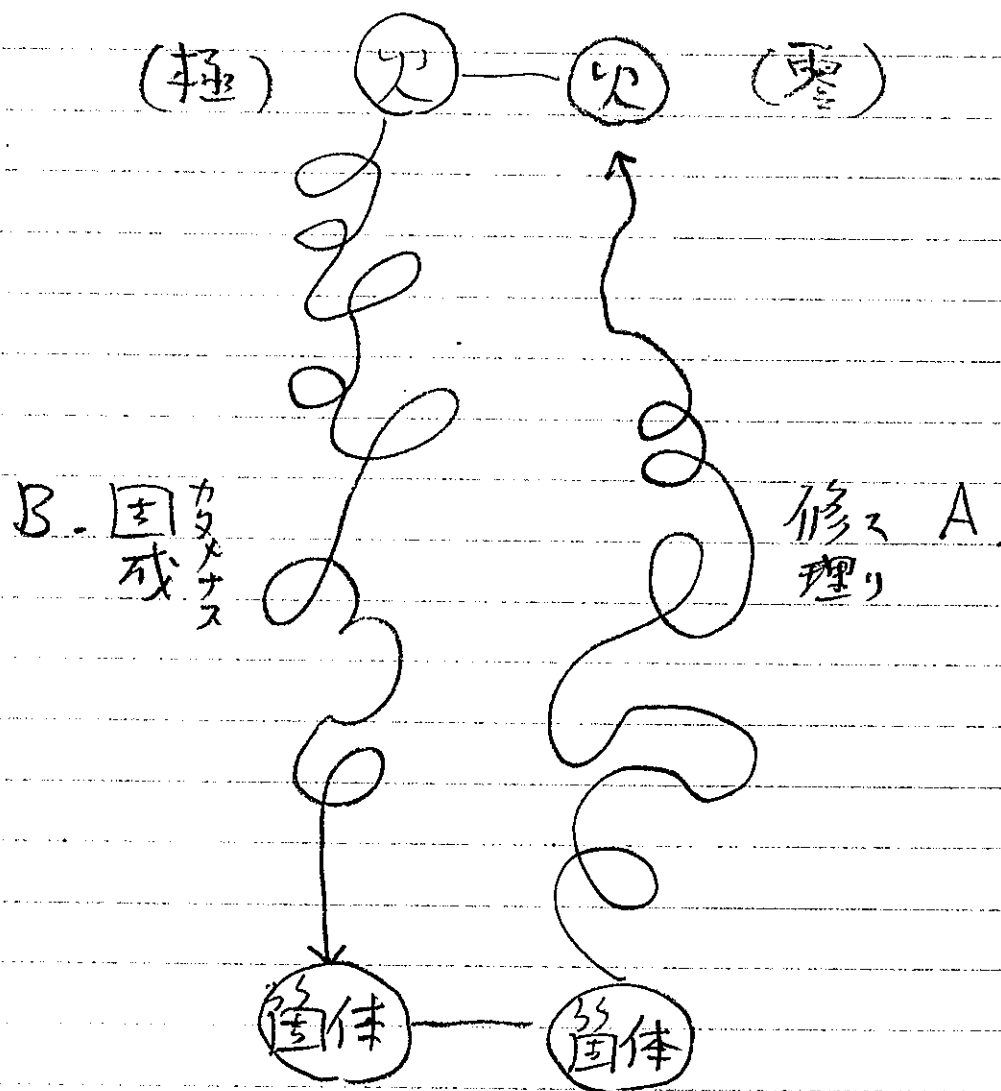


天御柱と国御柱は、ともに宇宙の側の実在であり、

タカミムスヒ・カミムスヒの顕現であり、合わせて心と御柱と称し、

これは「日神の御座」とあり、「宇宙の中心」の象徴である。

合本305頁



↓
全伴神 イザナギノオホミカミ

||

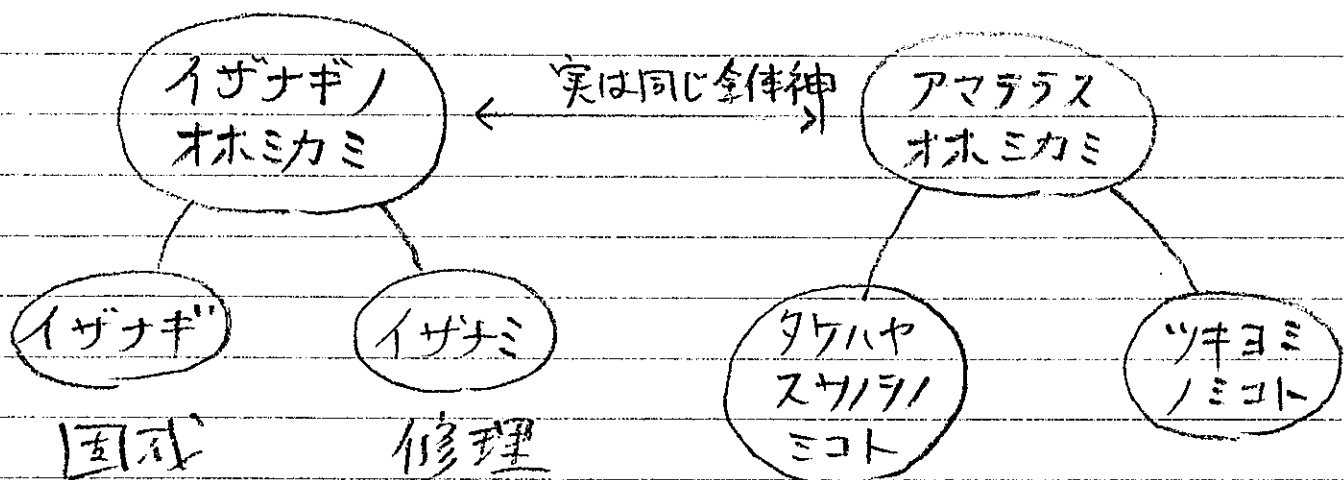
主神としての ミハシラウヅノミコ (アマテラスオホミカミ)
 (ヒ/カミとしても、フ/カミとしても)

古事記

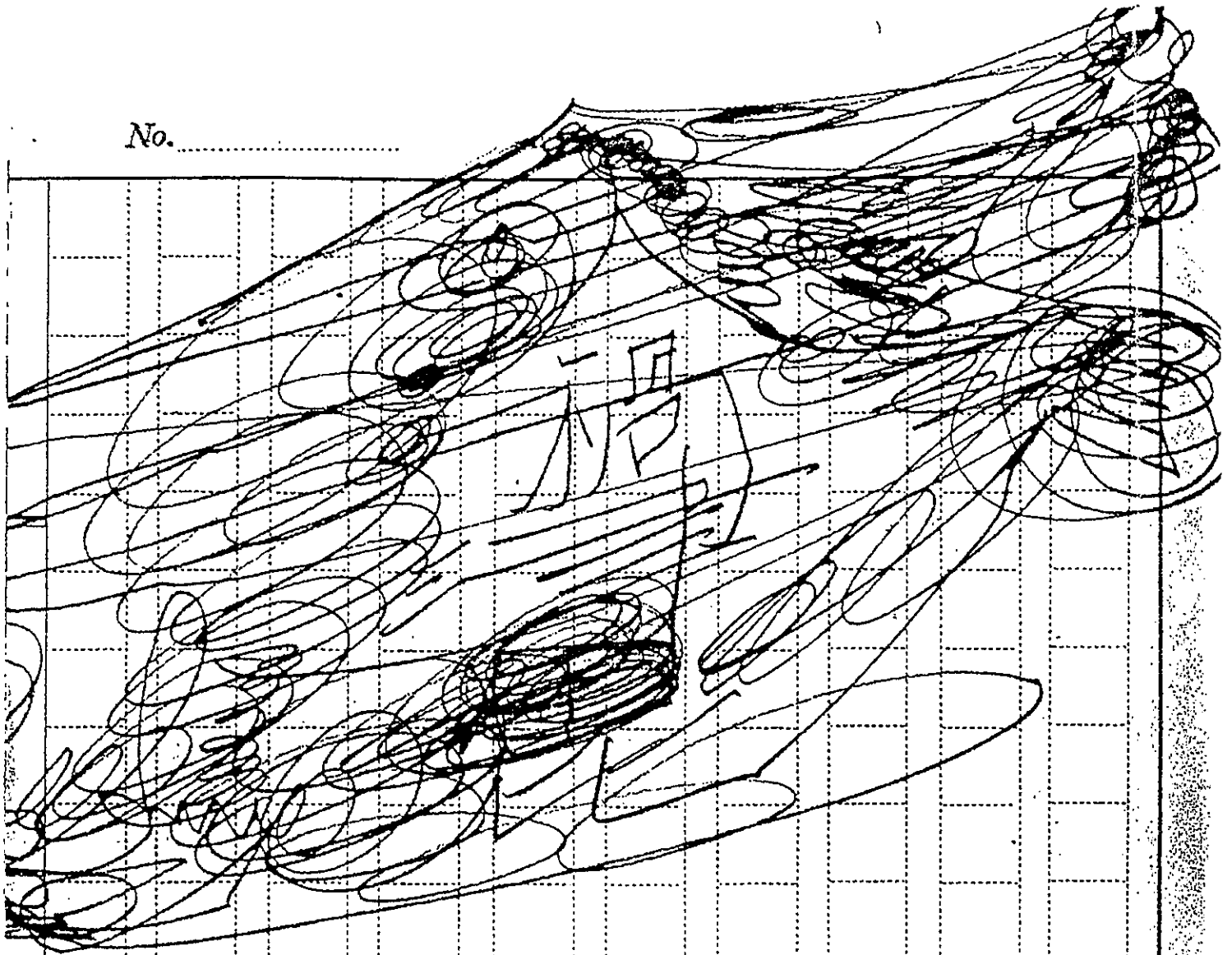
大御神 (全体神) はすべて、同じ全体神であり、
神名の違いは人間の側の観点や、その神徳による
呼び分けでしかない。

イザナギノ大御神 修型固成、宇宙の創造と破壊と司る。
アマテラス大御神 宇宙の中心としての機能。

→ アマテラスに内在する諸力 (ツキヨミ・スサノヲ) も
外在化させて、三位一体となった姿を
「三貴子」 (ミハシラノウヅノミコ) と称する。



No.



大禍津鬼

乖離分散と分散と

姓魔と此すはらうきも

たの

「マ」の生滅起伏であるからには、その「カミ」の意志を無視して、人のみの意志の自由は成立しない。それ故
此の問には、「マ」自体の意志で、それが則、「カミ」の意志で、㊦の出没変転であると答へる。

第十五問、

先に簡体成立の活動状態を学んだのですが、崩壊滅尽の姿はいかがですか。

□答、

之レには、日本古典がそのまま良き答案である。先には、諸冊二神の「和合」に因って、天地万有一切合
が成立した・生産された。ところが「火神」をお生みになったために・「火神」の出現に依って、大悲劇が演
され、ヨモツヒラサカの一線を境として、天界と地底・顕界神域と幽界魔境・極楽と地獄・とが湧出した。古
記・書紀・等のアノ記述はマコトに精密であり確実である。その記述をそのまま簡単な形で書くならば、先づ火
が出現する。その神の姿は、私どもの見慣れたところで、㊦と書く。それが、四象と呼ばれる簡体品を焚
滅ぼす。その状態は千態万様だが、いづれにしても、下向転落する。下向転落すると雖も、直線的ではない。
上進展するにも、右旋左旋・左旋右旋・変転しつつ、完成せんとしたる如く、此の品は㊦上に在りて、ま
㊦と化する。㊦と化しつつも、水火交錯、幾変転、遂に「空なる〇」と成る。「成る」とは、「〇なる一」で
る。

此の「〇なる一」は、勿論、解体解脱の極で、「根之国・底之国之主」たる須佐之男大神である。

このスサノヲノオホカミに養ひ育てられて、大国主神は完成される。則、堅固大成の極で、「一なる〇」
ある。古典は之レを、イザナギノオホミカミなるミハシラノウヅノミコだと伝へ、成り成りて、成り成りたる

修理と国成

である。之レは、向上の極と向下の極・極楽のハテと地獄のハテ・大の極と小の極・との一致点で、「○の○」^{アリテナキモノ}で、「如是神魔の体用」^{コレコノトホリ}で、「本体現象不二^マ不二^マ」なのである。

ささかにのくものいよりもほそければきづかざりけりみちのあやいと。
と、人の嘆じたる、宇宙一貫の「真」^{スデミチ}である。

此くの如くに乖離分散して、その極に達したる時、忽然として、一点不滅の火なることを証し来るのである。
また是ン[㊦]なるなり。

第十六問、

「此の神業を、神代の神はミソギと教へて、神界現成の御行事なりと拝承す」と修禊の辞に教へられてありますが、よりよきものを生産する、よりよき世界を創造する、よりよき人物を育成する。即、これが神業で神代の神のミソギと教へ給ふ所で、マツリであると解釈してもよろしいでございませうか。

くがナチノオホミカミなるミハシラノウヅノミコのこと



一致点「極」→ [〇の〇] → 一点不滅の火
アリテナキモノ
空なる○
スサノオノオホミカミ
須佐之男大神
一致点
修理

2020.4.7.提出

「ヒ」と「ミヅ」

多田流では「△ノボルモノ」と「ヒ」と呼び、また、「▽ウダルモノ」と「ミヅ」と呼んでいるが、これらは無論、コトワマであって、決して物理次元における^{ファイアー}火や^{ウォーター}水と直接に指し示している言葉ではない。

物理次元の^{ファイアー}火や^{ウォーター}水は、あくまでも「ヒ」や「ミヅ」の象徴である。^{ファイアー}火は上へ向かって燃え上がるものだから、

「△ノボルモノ」の象徴となり、「ヒ」と呼ばれるようになった。

^{ウォーター}水もまた、しばしば天から^{あめ}雨として^{あめ}降って来るものなので、

「▽ウダルモノ」の象徴となり、そのまま「ミヅ」と呼ばれるようになった。ただそれだけのことである。

幸12~13頁にも、『その「ミヅ」とは、現今の文字で、水とも、火とも、水火とも、火水とも書き得る』とあるとおり、「△ヒ」も「▽ミヅ」も、合わせて「ミヅ」なのである。

コトマとしての「ミヅ」は、本来「^ヒ零の作用」を意味しており、「ヒカリ」や「イキ」や「イノチ」とほぼ同義である。

幸13頁11～14行目にも、『^ヒフミで「ミヅ」と呼ぶのである。

火水であり、水火であり、(中略) ^{ミヅ}水であると共に、神の^{ヒカリ}光でもあり、火の^ヒ^ワ輪でもあり、^{カミワ}神輪で(後略)』と書かれているとおりである。

(ここから察するに、「ワ」というコトマ それ自体に、「作用力」の意味合いが含まれているのであろう。)

通常は、「ヒ」は実体としての「^ヒ零」を表わすことが多く、その作用力は「ヒカリ」と呼んで区別することが多いのだが、「ヒと^{ミヅ}ミヅ」と対^{つい}にして言う場合の「ヒ」は、しばしば「ヒの作用力」の意味となるので、注意されたい。

こうした作用力は、実際には「途切れることのない、一塊^{ひとがたまり}
^{はたらき}の作用力」なのだが、これをあえて「上昇の局面」と「下降
 の局面」とに分けて考え、それぞれに名を付けるならば、
 「△ノボルモノ」は「^ち地のミヅ（^{ツチ}地の側から今しも昇りつつある
 ところのミヅ）」となり、「▽^みダラルモノ」は「^{アマ}天のミヅ（^{アマ}天の
 側から今しも降りつつあるところのミヅ）」となる。

一方、より一般的には「△」は「^ヒ火」と呼ばれ、「▽」は
^{ミヅ}「水」と呼ばれるのだが、結果として、「^ち地のミヅ」とは、
 「^ヒ火と^{ミヅ}水」という形で対にして言う場合の「^ヒ火」と同義に
 なるのである。

ダラルモノ

▽としてのミヅ

合わせて、

— 広義のミヅ —

ノボルモノ

△としてのヒ

ダラルモノ

▽としては 天のミヅ

ノボルモノ

△としては 地のミヅ

また、広義のミヅがミイツとして無宇宙と宇宙との間を循環
する時、下降の局面においては、もっぱら固成^{カタメナス}が行なわれ、

上昇の局面においては、もっぱら修理^{スリ}が行なわれる。

故に、この循環全体を表現して、幸205頁のノリトのように、

『わが あ と ます や かへ
別れつ 合ひつ。解けつ 結びつ。往きつ 返りつ』という

のである。

また、考えようによっては、「▽^{クダルモノ}ミヅ、天のミヅ」とは

「イザナギ、天の御柱^{アメ ミハシラ}（固成の作用）」であり、「△^{ノボルモノ}ヒ

地のミヅ」とは「イザナミ、^{クニ ミハシラ}国の御柱（修理の作用）」である。

幸250頁のノリトは、今回の話題とは直接には関連が無い

が、上記の一点において、間接的にはつながりのある話と

言って良いだろう。

第七 變 易 無 常

古事記底本77頁、參照

九六

ミソギの行事に、「イブキ」と白すのは、アマテラスオホミカミ アマノヤスカハ天照大御神の天安河の神傳である。

其のイブキに、氣吹の字を充てて居るのは、「イ」の妙用であるとの義理から來たのである。

イとは、氣息の義で、廣い意味での呼吸である。廣い意味でと云ふのは、私どもの肉體的に、口や鼻や毛孔などの呼吸と云ふのではなく、萬類萬物が、大宇宙として、出入往返することを指すのである。都べてのものが、相互に有形と化^ナり、無形と變りつつ、相互の世界を造りつつ、まに破りつつ、變轉窮り無き活動の筋道を主る神音で、神名である。と白しますのは、大宇宙神の御活動を、日本民族は「イ」と稱へまつるのだとの義である。

日本民族の詞としては、神の稜威を仰ぎて發する音が、イなのである。

ミイズとは、本來、神としての◎を種子とし、ミを體とし、其のミズの威嚴妙用を仰いて、畏みまつるが故に、イの一音を加へて・イの音が加はつて、ミイズと稱へまつらるるのである。故に、ミズは、ミイズのイが省かれたのではなく、ミズにイの加はつたのがミイズなのである。

それで、此の「イ」は、大宇宙の呼吸だと云つたならば、稍眞を傳へ得るであらうか。大宇宙の呼吸であるから、小宇宙としての萬類萬物の呼吸も、其の内に運行する。小宇宙たる私どもの

呼吸を、大宇宙の呼吸と一つにする。これが、氣吹の神傳を一言にして盡すものである。それから、「ブ」とは、^フ經・二・等の複數語で、經過運行の敏速なる意味である。「キ」の音義は、本來、凝止結晶であるが、イブキのキは、キダとか、キザムとか、キルとかのキと等しく、區切りの意を示して居る。「ブキ」の二音を「イ」に加へたのは、神の稜威が、出でては歸るのに、必、全體を築きつつ、破りつつ、一段二段と變化して行くもので、人の身の漫然と考へるような、直線的のものではないことを教へた詞である。絶對的直線と云ふものの無いことは、現代科學も證明して居るが、古典は、太古以來之れを傳へて、氣吹の狹霧と教へてある。

氣吹の狹霧とは、神の稜威で、^{生産靈足產靈王留產靈神}三柱神として、無始終に、無際限に、神界樂土を修理固成遊ばされつつましますので、^{ヒツ}であるから、大小長短廣狹厚薄深淺等に拘はらず、直線ではない。従つて、禊祓の行事としての氣吹も、直線的ではならぬ。

前に、息を絶ると申しましたが、それは、^{フツ}經津能御魂の神儀で、^{イゲシ}五十串の祕事で、最初に、身を洗ひ清め、火食を絶ち、太陽を拜し、太月を仰ぎ、神名を奉稱して、振魂の神事を行ひつつ、漸次第と、鎮魂の境に入る。

鎮魂とは、「フツミタマ」で、^{フツスシノカミ}經津主神の神德に導かれつつ、神國樂園を築き成すの義である。「フツ」とは祓で、祓言で、二であり經過であるのフと、一定の區域から突き出で進み行き、亦

退き去るのツと、二音合成の一語で、摧破調伏で、改廢整理で、内外自他を靖寧和平ならしむるの祕言である。永世ナガヨの神事に、必、息を拂ひて後に吸ひ入るるのは、此の祕事から來て居る。「ミタマ」とは、神の稜威の身であるとの義で、生産靈イクムスヒ・足産靈タルムスヒ・玉留産靈タマツメムスヒの三産靈たる稜威であり、また人天萬類であるとの神の言靈コトタマである。

故に、「フツミタマ」とは、祓の結果を示したので、祓の神の神徳を體し得、また顯し得たるもので、氣吹戸主イブキドヌシの神儀と稱へまつるのである。唯、朝廷に鎮魂の御神儀として行はせらるるは、九重の上なる御事で、亦自異なるものでありませう。

振魂の行事は、其の初步の形式を、先に説明しましたが、立坐行臥の位置に於て、千變萬化するので、其の各に就ては、各自の境涯に應じて、お話するの外は無い。が、先づ初步の形式に熟して、さて、端坐或は直立して、息を拂ふ。拂ふには、上體を徐徐に前屈しつつ、經津能御魂フツノミタマの神音と共に拂ひ去るのである。が、之れは、容易に息の絶ゆるものではない。そこで、自分に能ふかぎりまで拂つて止める。此の止めると云ふのは、出しも入れもせぬので、それも出来るだけ長く止める。耐へられぬところで、徐に上體を起しつつ、強く深く長く大きく吸ひ入れる。此の時の神音は、宇斗能神言靈ウツノカミコトタマである。そうして、這入る限り入れる。其の入れかたは、喉ではなく、氣管ではなく、ココに入れるのである。ココに入れるには、此う云ふ要領で、繰り返し繰り返す。

ハラ（腹中）

ハラ